様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７００３２

研究課題名（和文）地域活動を通した子どもの主体形成と大人の支援について考える

研究課題名（英文）Consideration of community participation and adult support of children's

研究代表者
深作　拓郎（Fukasaku, Takurou）

弘前大学・生涯学習教育研究センター・講師

研究者番号：４０３８９８０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、10代を中心とした青少年の地域参加活動について、参与観察を中心にヒアリングなども試みながら調査を行った。
　その結果、①青少年は、地域活動を通して「マインド」を軸とした学びを重視し、市民性の涵養につながる相互学習を意識的に行っているということが確認された。そして、②青少年の活動を支える成人指導者や社会教育関係職員は、彼らの営みを「尊重し、見守る」手法を用いている点が共通してみられた。
　このことから、地域活動を通した青少年の主体形成は、彼ら自身が相互的に行う「マインド」を基軸とした学びを保障することと、そのための環境醸成が重要であることが明らとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I investigated community participating activities of young people in the center of their teens by participating observation as a main way and trying other ways for example hearing etc.
The result of this study revealed that ①it is important for young people to learn focusing on「the mind」and they consciously do mutual learning connecting citizen cultivation through community activities.In addition, ②adult advisers and members concerned with social education who support young people’s activities did the ways of「respecting and protecting」their activities in common.
These results revealed that the community participation of young people through community activities secure them mutual learning basically focusing on 「the mind」and the importance of forging atmosphere for the community participation of young people.

研究分野：社会教育学

キーワード：子どもの社会教育　子どもの参加・参画　地域参加

１．研究開始当初の背景

子どもが地域社会との接点が乏しくなったとの問題関心から、学校教育では、さまざまな体験活動のほかキャリア教育として職場体験やインターンシップが取り組まれており、社会教育においても、多世代交流や体験活動が取り組まれている。また、放課後の遊びや体験活動、居場所機能を充実させようという観点から、文科省・厚労省合同で「放課後子どもプラン」を実施している。

2010 年施行の「子ども・若者育成支援推進法」は、これまでばらばらに手がけていた子どもや若者支援のネットワーク化を図るとともに、日本国憲法や子どもの権利条約の理念とも関連づけ、子どもの意見表明を保障するための施策や参画の取り組みを明記している。子どもの権利条約が国連で採択されて 20 年、日本国も批准から 15 年が経過した。単なる「小さき者」としての子どもではなく、一人の市民として参加・参画の機会や意見を表明する機会も増えてきている。

すなわち、社会を形成する主体の一員である子どもの教育（教育環境）を検証するとともに、その声を反映させていく社会づくりを実質的に図ることが必要な段階に来ていると言えよう。法・制度の整備だけではなく、子どもの実践的で主体的な社会参加活動を促進するための地域社会側の、いわばまなざしと受け皿が必要なのではないだろうかと考えている。

２．研究の目的

本研究は、10 代を中心とした中・高校生、大学生（以下、青少年と称す）の社会参加活動の実践を検証することで、子どもの主体形成と支援する側の姿勢や体制などのモデル構築を行うことを目的に取り組む研究である。

参与観察とヒアリングを中心に行う調査から、子どもたちがどのような組織や活動拠点を持って活動を展開し、どのように変容していくのかを明らかにする。加えて、子どもたちを直接ファシリテートする支援者をはじめ、行政や NPO、地域団体などといった活動を受け入れる側の動態についても検証する。それにより、子どもたちが「社会の一員」として存在意義を自覚し、主体的に活動していけるための環境について検討していく。

３．研究の方法

本研究では、まず、新聞記事を手掛かりに、青少年が掲載されている記事を拾い出し、その傾向を捉えることで、青少年の地域参加に対する社会の関心を把握することを試みた。次いで、フィールドワーク（参与観察・ヒアリング）を試みた。調査開始時は 3 団体であったが、調査先団体の都合もあり一部変更を余儀なくされた。最終的な調査対象団体は、①弘前大学の学生・教員研究会「らぶちる -LOVE for Children」(以下、「らぶちる」)、②岩手県久慈市中央公民館「ヤングボランティア SEED」(以下、「ヤンボラ」)、③青森県七戸町こまっこジュニアリーダーズクラブファミリー(以下、「こまっこ」)である。最終年度には八戸こども未来ネットの高校生ボランティアチームへの調査も試みた。

参与観察は「らぶちる」「ヤンボラ」を中心に行い、ヒアリングは、彼らの活動中に加えて、調査対象団体が一堂に会した交流会（参加者内訳・中学生：5 名、高校生 33 名、大学生 7 名）を通して実施した。加えて、「らぶちる」は個別ヒアリングを 2015 年 11 月～12 月にかけて実施し、13 名の協力が得られた。

４．研究成果

(1)新聞記事の整理からの検討

新聞記事(東奥日報、2012～13 年)を対象に、青少年が掲載されている記事を拾い出し、分類をすることで傾向を捉えることとした。「子ども」もしくは「児童・生徒」対象としたものから、「地域」が関係しているものに

再分類をした結果、各年約 50 の記事が抽出された。その対象と内容と辿ると、学校教育の場面での活動がほとんどで、とりわけ実業系の高等学校における地元の産品を使った商品開発、修学旅行等での地元特産品の PR などが多く、いわゆる学校外における地域参加を紹介している記事は 4 件に過ぎなかった。補足調査として朝日新聞(全国版 2012～13 年 2 年間を対象)でも同様に拾い出しを試みたが、同様の傾向がみられた。

このことから、地域参加活動の必要性は唱えられつつも、その活動自体は日常的に取り組まれているものであり、学校行事のような大きなトピックス比較すると目に留まりにくいということが明らかとなった。

(2)参与観察並びにヒアリングから

①参与観察

いずれの団体とも、①地域の幼児・児童を対象とし、②日常の拠点（ベース基地的な空間）があり、③成人の指導者が常時存在していること、が共通している。

定例の話し合いは、拠点となる会場で行われている。話し合いには、成人指導者も同席していることが多いが、進行等はすべて青少年当事者たちで行っている。イベント当日も同様である。「ヤンボラ」以外は６才程度の年齢差があるが、基本的には対等な人間関係性を築いている。成人指導者も含めサークルネームで呼び合っているなどの工夫もみられた。

成人指導者の役割は、基本的には中高校生に委ね「見守る」姿勢を貫いており、準備の過程での補足やイベント終了後の省察などの促し、外部団体や成人との連絡調整や資金・備品管理などが主であった。

青少年を「見守る姿勢」については、①主体的な参加・参画、②自分たちで答えが出せるような促しに徹する、③一人ひとりを把握しながらも適度な距離を保つ、の３点が共通していた。

②中高校生のヒアリングの分析から

ヒアリングでは、「参加のきっかけ」「参加してみて、続けている理由」「参加してからの自身の変化・気づき」を中心に行った。

「参加のきっかけ」は、学校（授業）や友人からの紹介が圧倒的に多かったが、「こまっこ」では、小学校高学年時の子ども会行事で出逢ったリーダーに「憧れた」という回答も得られた。「子どもに興味がある」「将来保育士や教員を目指して」などのキャリアを意識した参加動機は見られなかった。

「継続している理由」については、「楽しい」「達成感」「手応え」を挙げる中高校生がほとんどで、どのようなところが楽しいかを質問すると「学校とは違って、自分たち主導でやれること」という答えが多かった。

「参加してからの自身の変化・気づき」については、多様な回答であったため、知識や技術の習得に関する内容（以下、「スキル」）、人と関わる姿勢、活動の意義や目的、心構えなどの内容（以下、「マインド」）、将来の進路に関すること（以下、「キャリア」）で分類した。その結果、圧倒的に「マインド」に関する回答が多かった。活動における対象者（ここでは、「子ども」「地域の大人」）への配慮、それぞれの団体で理念としていることなどに関連づけて自身の学びとしている様子が読み取れた。遊びや野外活動に関する「スキル」に関する意見も挙がっていたが、「キャリア」に関連したものは１名のみであった。このほか、成人指導者の支援を受けながらも自分たちで活動を進められていることへの意見も多く、学校教育のように教えてくれる人はいないが一緒に悩みながらも対等な関係性が彼らには居心地の良さを感じさせていることも読み取ることができた。

また、ヒアリング全般を通じて「憧れ」というワードが散見された。各団体のリーダーや最終学年の子どもたちからは共通して

「（活動対象の子ども、各団体の後輩に）憧れられる立場になる」という主旨であるのに対し、下の学年の子どもたちは「先輩」に対して「憧れる」という主旨のものであった。

以上のことから、中高校生たちは、「マインド」を主軸とした学びを成果として重視し、「憧れ」というワードからは、水平的な関係性であるからこそ、互いが影響し合える、その象徴であり活動を継続・発展させていく上での目標、成果の指標としていることが明らかとなった。すなわち、進路としての「キャリア」ではなく、人間形成のモデルとしての「キャリア観」が内包しているのではないかと思われるが、本調査では、これ以上深めることができなかった。

③「らぶちる」のヒアリングから

大学生へは個別ヒアリングを実施した。個別で実施したことを考慮しなければならないが、中高校生と同様に、「参加のきっかけ」「参加してみて、続けている理由」「参加してからの自身の変化・気づき」を中心にヒアリングをして分析をしたところ、「スキル」よりも「マインド」重視であることをはじめ、他の項目についても中高校生とほぼ同様の傾向がみられた。

ただし、中高校生と違う点としては「楽しい」「憧れ」などの漠然としたワードではなく、一人ひとりが具体的なエピソードから「手応え」・「達成感」・「気づき」について語られていることである。特に、活動の対象者である「子どもの主体性」と活動に携わる「自分自身の主体性」についてのコメントが多く見られた。また、地域の大人の側との互恵的関係が築けたことへのコメントも散見された。2014 年 4 月に行った予備調査（大学生 7 名）において、児童期・学童期のエピソードについてヒアリングをした際に、地域社会と関わることに対してポジティブな体験が多かったことから、地域参加活動への参加に対しても積極的であり、かつて自身が体験したことが再現できていることへの達成感があることが推察できる。

(3)まとめ

本調査から、10 代を中心とした青少年は、地域活動を通して、「スキル」だけではなく、目的や意義、人と関わる際の姿勢といった「マインド」を培っていくことを重視し、子どもたちの笑顔やイベントを通しての達成感が学びの手応えとして感じとていることが明らかとなった。具体的には「憧れ」と表するように具体的な目標の存在が彼らにとっての「マインド」の重要な要素であり、「憧れる・憧れられる」相互的関係こそが、学校教育にはみられない、自覚的に先輩から「受け継ぎ」、後輩へ「託す」という持続可能な学びを生みだしているのである。

そして、青少年の活動を支える成人指導者は、教授・指導ではなく、彼らの営みを「尊

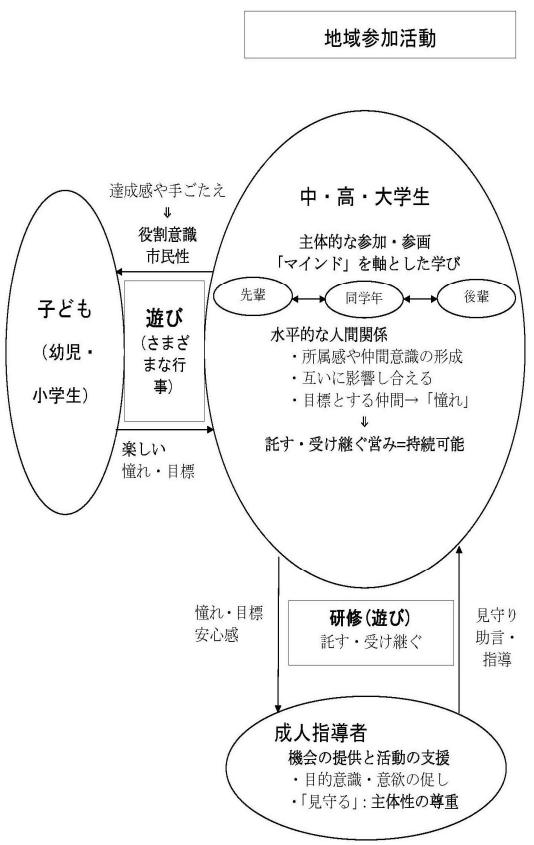

図　青少年の地域参加活動を通した学びと主体形成

重し、見守る」ことを基本に据え、必要に応じて「助言・指導する」ことが共通点として把握することができた。しかしながら、成人指導者がこの手法を習得していく過程までは本研究では明らかにはできなかった。

以上のことから、社会教育行政をはじめ大人の側は、青少年に対し、参加機会の提供やマンパワーとしての活用ではなく、彼らの自身が活動を通して培われる「マインド」を中心とした学びを促すことにより、継続的な地域社会への参画に発展していけるような環境醸成が重要であることを明らかにすることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）
<u>深作拓郎</u>「大学生が担う大学開放に関する一考察-ちびっこ海賊の佐井村まち探検 3 年間の取組から」弘前大学生涯学習教育研究センター年報第 18 号、2016 年、15～26 頁。

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
深作　拓郎（FUKASAKU, Takurou）
弘前大学・生涯学習教育研究センター・講師
研究者番号：40389804

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：